



家族に残す 私の笑顔

父を亡くした時、施設で十数年過ごしたため若い頃の写真しかなく、遺影で悩みました。自分の葬儀の時のことを考えておきたいのですが。 高知市・中田青司さん(61)

「人生最後の写真」と思わずに

写真家 小野庄一さん



おの・しょういち 1963年生まれ。100歳以上の肖像写真で太陽賞。東京・巣鴨に「百歳写真館」を開く。写真集「百歳王 笑顔のクスリ」など。

100歳以上の方の肖像写真を撮り続けています。横浜市の施設で3人の方を撮った時のこと。画面で見せると、本人は「これ、私なの?」と喜んでくれ、職員も「こんな

「人生最後の写真」と考えると難しくなってしまう。還暦や子どもの結婚式などの機会に撮り始め、5年、10年おきに写真館で撮ってはどうか。そして、撮

影後にしまい込むのではなく飾ってほしい。私は「自分史額」を提案しています。アルバムから子どもの頃や新婚当初、現役時代の写真を選び出し、現在の写

真と組み合わせ額に入れ、居間などに飾っておきます。介護が必要になり5分前のことは忘れるようになっても人にはそれまでに積み重ねた人生があります。「小学校の

発表会で」「新婚の時に」と思い出し話さずきつかけになり、聞く方もその人の歩んだ時間の重みを感じることが出来る。そして、もしもの時には遺影にも使える。遺影は家族のものでもあると思えます。だから毎日見続けられる素敵な写真がいい。その人らしい明るめの服で、少し歯が見えるくらい笑顔を引き出すようにしています。

自分らしい遺影を

最近多い遺影は

- 無地
- モノクロ
- 正面
- 正装
- 真顔
- 黒の顔



従来のタイプ



最近多いタイプ

- カラー
- 花やリボン
- 笑顔や自然な表情。お気に入りのポーズや服
- 背景に花や山を使って季節感を出すことも
- 紫やピンクの顔も
- 仕事道具や趣味の品と一緒に撮ることも

撮影

撮る時のアドバイス

- 「最後の写真」と構えないで
- どんな顔を覚えておいてほしいか考えて
- 声が聞こえてきそうな写真や
- 服やポーズ、背景にもあなたらしさが出る
- 還暦など機会をとらえて定期的に
- プリントとデジタルデータはセットにして保管場所を知らせておく

(小野庄一さん、石崎公子さんの話から)

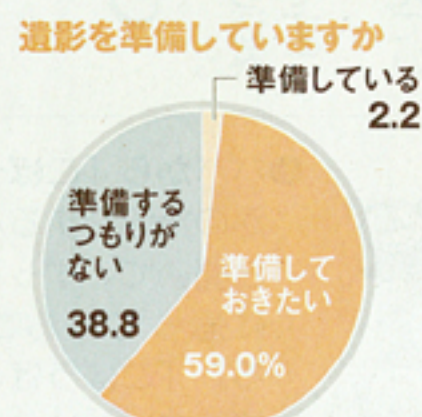
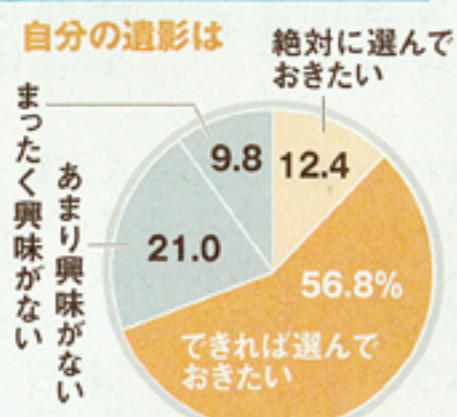


自分史額とは

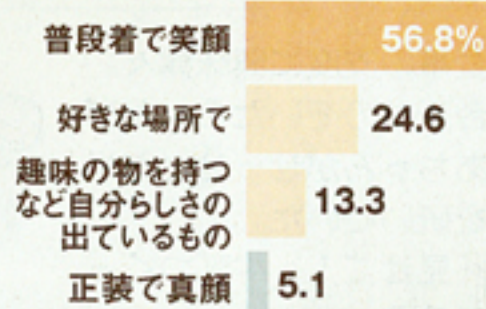
いまの自分の笑顔の写真と、昔の写真(アルバムに残る子ども時代や新婚時代、現役時代の写真)で作る。短い文章も添えて。普段から飾っておき、もしもの時には遺影に

意識調査

アスカネットの2014年調査から



遺影写真はどんな風になりたい(複数回答)



グラフィック・小林 世以子

1 備えておきたい

撮影会でお気に入りを選んで

「いい表情です、柔らかく。次はこっち向きで」。総合葬祭業「メモリアルアートの大野屋」(東京)が7日、横浜市で開いた「遺影撮影会」には約60人が参加。プロカメラマンに声をかけられつつ1人10〜20カット撮った。

横浜市の女性(66)は「昨日は結婚記念日。こちらあたりで私たちも用意した方がいいかな」と夫婦で参加した。両親を見送った時、遺影写真が見つからず大変な思いをしたという。「葬儀後も仏壇で毎日見るものだし、子どもに迷惑をかけたくない」と女性。夫(72)は「カメラマンがリードしてくれた。また撮ってもら

うともっとよくなるかも」。一

緒にモニター画面を見てそれぞれの写真を選んだ。お気に入りの紺のスーツとネクレスで写った横浜市の女性(66)は、両親の時は結婚式の集合写真から引き伸ばしたが、ぼやけていて何回も作り直した。自分がいつ病気で要介護状態になるかもしれないとも考えた。写真を選び終えて「自分を見つめ直す機会になりました」。

500円で会員は無料。後日1枚送られる。大野屋広報室によると、東京や千葉でも開くが、希望が多く開催日を増やした。「制服やフリル付きドレスを持参する人もいる。自分らしいポーズで笑顔の写真を選ぶ方が多いですよ」

2 やっぱモノクロ?

カラーで自然体がいまどき

葬儀社から依頼を受け年間約30万枚の遺影を作成するアスカネット(広島市)が昨年、20〜60代の女性500人に調査したところ、7割が自分の遺影を選んでおきたいと答えた。だが、すでに準備しているのは2%だけだった。

全日本葬祭業協同組合連合会(東京)の担当者は「いい写真で送りたい送りたいという気持ちには広がっている。しかし、遺影と言うとまだ抵抗感があるようです。今の自分の肖像写真と考えると、実

際の葬儀の場では伝統的な「モノクロ、礼装、正面、真顔」から、最近では「カラー、普段着、自然なポーズ、笑

顔」が好まれているという。加工技術は進歩している。集合写真でもヒントが合っていると顔の大きさが親指大であれば遺影を作れるという。メガネや帽子を消すこともでき、修整用の服装や背景も約100種類用意している。「趣味の山やゴルフ場を背景に使える方もいます」と担当者。気を付けないのが保管場所だ。せっかく写真を用意していたのに、葬儀が終わってから家族が気づくこともある。アスカネットが運営する「遺影バンク」はインターネット上に遺影データを預けておき、葬儀社が検索して引き出すサービス。自分史や家族への言葉も保管できる。

3 どんな写真にする?

声聞こえてきそうな1枚を

「失敗しないエンディングノートの書き方」の著者石崎公子さん(55)は「遺影は残された者への思いやりを話す。亡くなってから葬儀までの短い間に写真を探す負担を軽くするだけではない。石崎さんの義父が亡くなる少し前、家族の会食会に友人のカメラマンに来てもらい、写真を撮ってもらった。義母は遺影に使ったその写真に「飛び出して来そう。お父さんがいい顔で笑ってくれるから、さびしくないわ」と話したという。

石崎さんは「理想の遺影はその人の声や聞こえてきそうな写真」と言う。本人が伝えたい言葉や思い出を添えておくという。背景や服、ポ

ズ、持ち物にもその人らしさが現れる。「子どもの成人式や結婚式を過ぎると、写真を撮らなくなる。でも撮ってみると、しわや白髪も含めて自分って割といいかもと自信を持ってたり、もっと優しい顔を残したいと思ったりもする。生き方は顔に出る。生き方の定期健診と考えると、最近では遺影撮影を掲げる写真館も出てきた。1万〜3万円が相場だという。出張撮影に依る写真館もある。「費用だけでなく、写真の大きさや枚数、デジタルデータをも

らえるかどうかを確認を。プリントとデータをセットで保管しておくというです」(佐藤孝秋)